

グッドプラクティス

Case.1

無償資金協力

ベオグラード市公共輸送力復旧計画(セルビア)

「戦後復興」から「普通の国」へ

バルカン半島の中心に位置するセルビアは、1990年代に起きた旧ユーゴ紛争が原因で国際社会から経済制裁が課され、コソボ問題ではNATOによる空爆を受ける等、多くの混乱を経験しました。その後、2000年の民主化以降、セルビアは復興と経済改革等に取り組み、日本を含む国際社会がその改革努力を支援してきました。

セルビアに対する日本の支援の中で、最も現地の人々から感謝される支援例として、無償資金協力によりベオグラード市交通公社に供与されたバスが挙げられます。ベオグラード市内を歩いていると、そこかしこで「from the people of Japan」(訳:日本の国民から)の文字に日本の国旗とセルビアの国旗を組み合わせた黄色いバス(通称「日本人」)に出くわします。

一連の紛争が原因で、ベオグラードの公共交通は劣悪な状況に置かれ、廃車寸前の老朽化したバスに乗客が満員の状態で運行されているのが常でした。この援助で供与されたバスは、便数の増加に貢献したことはもちろんですが、その黄色く明るい車体、乗り心地の良さ、清潔感から、供与してから月日が経過した現在でも、市民の欠かせない足として重宝されています。日本が供与したバスは、他のバスを敬遠し、あえて待ってでも乗る人々がいる、自分の使っているバス路線に「日本のバス」を走らせて欲しいという要望が交通公社に寄せられたり、現地でも高く評価されています。



セルビア・ベオグラード市内に設置された「日本の泉」



© JICA/久野 真一
「ベオグラード市内を走る“黄色いバス”。紛争直後に日本から緊急支援で提供された」



© JICA/久野 真一
「車体には『from the people of Japan』(訳:日本の国民から)の文字が」

日本とセルビアは、地理的に遠く離れていますが、日本が同国の国づくりを一貫して支援してきたことは現地でもよく知られています。例えば、ベオグラード市内のカレメグダン公園内には「日本の泉」と呼ばれる噴水が設置されています。これは、長年にわたってセルビアを支援し続けた日本に対して、友好的な謝意を示せないか、という市民の声によって設置されました。そんな親日国であるセルビアは、東日本大震災の際、日本に支援を送ってくれた国でもあります。当時、セルビア国民の平均月収が5万円・失業率も20%以上と、決して裕福な国とは言えない状況であったにもかかわらず、震災1ヶ月後には約2億円の寄付が日本に寄せられました。ベオグラード市が主催したチャリティ・イベントには少なくとも数千人が参加し、これまでの日本からの支援に感謝し、それに対する恩返しをするため、いち早く支援に動いた国がセルビアでした。日本が長年続けたセルビアに対する支援は、セルビア国民の親日感情の向上にも貢献しました。

Case.2

技術協力

農業機械化強化プロジェクト及びフェーズ2(ブータン)

50年以上前から始められた農業協力。

ブータン王国は九州とほぼ同じ面積の国土(約3,800km²)で、南側のインドとの国境付近は海拔約300メートル、北側の中国との国境付近は海拔7,000メートル以上という標高差の著しい山岳国です。国民総幸福量(GNH: Gross National Happiness)という理念を憲法に掲げ、国づくりを実践していることでも有名です。

「幸福の国」として知られているブータンでは、その昔、狭い土地と高地特有の厳しい気候が原因で、農業国にも関わらず低い食糧自給率が問題となっていました。そんなブータンの農業を発展させたのが日本の技術協力でした。

ブータンに対する日本の協力は、今から半世紀以上前、1964年に西岡京治専門家(故人)が派遣されたことに始まります。それまで、ブータンに対しては隣国のインドのみが援助を行っていたこともあり、別の遠い島国から来た西岡氏にとって、配属先である農業局からの理解や評価は当初なかなか得られませんでした。このような困難な状況の中で、西岡氏は、まず農家にとって実際に役立つ活動を自らやってみせることから始めました。

そして、パロ(地名)の実験農場を拠点に、収量や品質がすぐれた日本



© JICA/関 健作 「田植え時期のブータンの様子」



実を結ぶ、協力。



© JICA 「『ブータン農業の父』故・西岡京治氏」



© JICA/関 健作

の米や野菜・果樹の紹介・普及と栽培指導を行い、さらには、農具や機械の導入、灌漑水路や道路・橋の建設まで手掛け、ブータンの農業発展に大きく貢献しました。これらの活動は、現在、種子の生産が「国営種子センター」、食品加工が「ポスト・ハーベスト・センター」、そして農業機械が「農業機械化センター」として受け継がれてきています。

西岡氏は1964年から現地でも働くまで、約30年もの間、ブータンの農業開発に力を尽くしました。その献身的で誠実な活動は「ブータン農業の父」として敬愛され、第4代国王からは「最高に優れた人」という意味の名誉称号「ダショー」が外国人として初めて贈られました。また、西岡氏が亡くなった際には、農業大臣を葬儀委員長として国葬が執り行われ、ブータン全土から多くの人々が集まり、その死が悼まれました。長年に渡り、実施され続けた日本の技術協力は、ブータンの発展のみならず、両国の絆を強く結びつける役割も果たしています。